国際仏教学大学院大学研究紀要
第 23 号（平成 31 年）

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIII, 2019

# 『宝性論』の tathāgatagarbha（如来蔵）解釈考

斎　藤　　明

# 『宝性論』の tathāgatagarbha（如来蔵）解釈考

斎藤　明

## はじめに

周知のように、如来蔵・仏性説は大乗仏教を代表する仏教思想の 1 つである。如来蔵思想研究については、およそ半世紀にわたり、J. Takasaki［1966］による『宝性論』の英訳注研究、ならびに高崎直道『如来蔵思想の形成』［1974］とその関連業績が内外の研究を主導してきた。この間、高崎自身による研究の進展とともに、中村瑞隆［1961］、D. Seyfort Ruegg［1969］, L. Schmithausen［1971］による関連研究、原実の garbha 研究［1987］［1994］、下田正弘による『大乗涅槃経』の研究［1991］［1997］と『如来蔵と仏性』（シリーズ大乗仏教 8）［2014］の編纂を通した如来蔵・仏性思想研究の総括的諸論考、M. Zimmermann［2000］［2002］［2014］による『如来蔵経』に関する一連の研究、加納和雄［2014］［2017］による『宝性論』のインドからチベットへの伝承に関する研究が注目される。また、松本史朗［1986］［1989］［1994］、袴谷憲昭［1990］他による如来蔵・仏性思想―さらにはこれに関連する本覚思想―に対する一連の批判的研究も記憶に新しい。近年はまた、M. Radich［2015］や Chr. Jones［2016］［2018］による最新の成果も注目される。

しかし、tathāgatagarbha（如来蔵）をめぐっては、残念ながら、今なおその語意解釈に定説が得られていない。いずれも garbha の意味理解とともに tathāgata-garbha という合成語の解釈が関係する。いずれにせよ、先入見を排し、この合成語が登場する文献に即し、文脈をふまえながら、また garbha 合成語の一部にふくむ広い用例を勘案しつつ、あらためての

議論が求められていよう。

以上のような研究史と課題を念頭に置きながら、本稿は、『如来蔵経』に対する広義の注釈文献ともいえる『宝性論』の文脈に立ちかえり、当該術語の意味を再考したい。同論は「如来蔵」（tathāgata-garbha）の合成語解釈を示す貴重な論書である。「すべての有情は如来蔵である。」と宣言したのは『如来蔵経』であるが、同経はこの合成語そのものを分析的に解説することはなく、9つの譬喩をもって宣言の意図を説明する。これに対して、『宝性論』はこの「すべての有情は如来蔵である。」という一文の解釈を中心に、三宝出現の原因としての如来蔵を直接のテーマとして詳論する。すなわち、この一文内の「如来蔵」の語を（1）法身、（2）真如、（3）種姓の3つの観点から捉え、この合成語に対して格限定複合語［(1)］と所有複合語［(2)（3)］の解釈を提示し、詳説する。

以下では、tathāgatagarbha（如来蔵）を3つの観点から総括的および各論的に解説する『宝性論』の関連する2箇所の内容を訳出した上で、分析を加えたい。

## I　有垢真如（samalā tathatā）としての如来蔵（tathāgatagarbha）

「ここで、有垢真如に関して、「すべての有情は如来蔵（如来の胎児）である」と［『如来蔵経』に］説かれているのは、いかなる意味によるのか。

［本頌 5］「(1) 有情の類は仏智に内在しているから[1]、(2) そ［の有情の類］が無垢であることは本来的に不二であるから、(3) 仏の種姓を指して、その［仏種姓の］果報［すなわち、仏＝如来］の比喩的表現であることから（upacārāt）、すべての生き物（有身者＝有情）は仏の胎児（buddhagarbha）である、と説かれた。」(27)

[1] See Takasaki [1966: 197, n. 4].

［この本頌によって何が示されているのか。］

「(1) 正覚者の身体（＝法身）が遍満するから、(2) 真如が無差別であるから、また (3) 種姓［があること］から、常にすべての生き物（有身者＝有情）は仏の胎児（buddhagarbha）である。」(28)

要約すると、3種の意味で、常に「すべての有情は如来蔵（如来の胎児）である。」と世尊は説かれたのである。すなわち、

(1) すべての有情に如来の法身（tathāgata-dharmakāya）が遍満しているという意味で、

(2) 如来の真如（tathāgata-tathatā）が無差別であるという意味で、および

(3) 如来の種姓（tathāgata-gotra）が実在するという意味で、

である。さらに、これら3種の意味の句についての解説は、のちに『如来蔵経』にしたがってなすであろう。」

(tatra samalāṃ tathatām adhikṛtya yad uktaṃ sarvasattvās tathāgata-garbhā iti tat kenārthena/

buddhajñānāntargamāt sattvarāśes
tannairmalyasyādvayatvāt prakṛtyā/
bauddhe gotre tatphalasyopacārād
uktaḥ sarve dehino buddhagarbhāḥ// (27)

saṃbuddhakāyaspharaṇāt tathatāvyatibhedataḥ/
gotrataś ca sadā sarve buddhagarbhāḥ śarīriṇaḥ// (28)

samāsatas trividhenārthena sadā sarvasattvās tathāgatagarbhā ity uktaṃ bhagavatā/ yad uta sarvasattveṣu tathāgatakāyaparispharaṇārthena tathāgatatathatāvyatibhedārthena tathāgatagotra-saṃbhavārthena ca/ eṣāṃ punas trayāṇām arthapadānām uttaratra tathāgatagarbhasūtrānusāreṇa nirdeśo bhaviṣyati/) (RGV, pp. 25.18–26.10)[2]

## II　如来蔵の三種の本質：法身（dharmakāya）、真如（tathatā）、種姓（gotra）

「以上のように、貪り等の 9 つの垢（mala）は［色あせた］蓮華などに等しく、［如来の］本性（dhātu）は、3 つの本質を包摂することから、［蓮華中の］仏などと類似性をもつ（sādharmya）。」（143）

3 種の本質（svabhāva）に関して、心の浄化の原因である如来蔵が、仏の像（buddhabimba）等と、9 通りに類似性をもつことを理解すべきである。3 種の本質とは何か。

「その（如来の）本質は法身、真如、種姓でもあると［理解すべきである］。それ（本質）は［それぞれ、蓮華中の仏、衆蜂と蜂蜜、穀皮中の実という第 1 から第 3 までの］3 つ、［汚物中に落ちた金塊という第 4 の］1 つ、および［貧家地中の宝蔵、果実皮の中の種子、弊衣中の宝像、貧女胎中の王子、泥模中の金像という第 5 から第 9 までの］5 つの喩例によって知るべきである。」（144）

3 つの、すなわち仏の像、蜂蜜、実の比喩によって、その［如来の］本性は法身を本質とすると理解すべきである。1 つの、すなわち金の比喩によって真如を本質とすると［理解すべきである］。5 つの、すなわち［宝］蔵と、［果皮内の種子から生じる果］樹と、宝像と、転輪王と、金像の比喩によって［自性身、受用身、変化身という］3 種の仏身を生じる種姓を本質とする、と［理解すべきである］。

(1) その中で、法身とは何か。

「法身は 2 種類と知るべきである。よく垢をはなれた法界と、それと同質（［法界］等流）の、深遠な、あるいは種々の方法による教説であ

---

[2] 以下、『宝性論』*Ratnagotravibhāga*（RGV）のテキストは Johnston［1950］による。網掛け部分は訂正箇所。Takasaki［1966: 398］, Schmithausen［1971: 156–157］, 高崎［1989: 322–330］参照。アンダーラインは筆者によるもので、「如来蔵」（tathāgatagarbha）の三種の合成語解釈を示す箇所。

る。」（145）

諸仏の法身は2種類として理解すべきである。［第1は、］きわめて清浄な法界で、無分別智の活動対象である。それはまた、諸々の如来がそれぞれに証得した法（adhigamadharma）に関して知られるべきである。

［第2は、］それを獲得する原因で、きわめて清浄な法界と同質（等流）の、教化される者（所化）に応じた、他の有情たちに知らせるために生まれるものである。それはまた、教説の法（deśanādharma）に関して知られるべきである。

さらにまた、その教説［の法］は微細な［法の設定方法］と粗大な法の設定方法との区別により、2種類である。すなわち、深遠な菩薩蔵（bodhisattvapiṭaka）の法の設定方法による教説で、勝義真理に関してあるものと、種々の契経、重頌、記別、偈（伽陀）、自説、因縁等の種々の法の設定方法による教説で、世俗真理に関してあるものとである。

「出世間のものであり、その喩例は世間では得られないので、［清浄法］界は如来とのみ類似性が示される。」（146）

「微細で深遠な方法による教説は、蜂蜜が一味であるようなもので、種々の方法による教説は、さまざまな殻物の実のようなものと知るべきである。」（147）

というように、これら3つの、仏の像、蜂蜜、実という比喩によって、如来の法身が有情界（sattvadhātu）に余すところなく遍満しているという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」（tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。なぜなら虚空界の［外に］物体（色）［が存在しない］ように、有情界のいかなる有情も、如来の法身の外には存在しないのであるから。じつに、以下のように説かれている。

「あたかも虚空は常に遍在すると認められるように、それと同じように、それ（仏性 buddhatva）は常に遍在すると認められる。あたかも虚空が形あるものに遍くゆきわたるように、それと同じように、それは有情の群れに遍くゆきわたっている、と。」（MSA 9.15）

（2）真如

「本性（prakṛti）は変化せず、善妙であり、清浄であることにより、真如に対して、金塊の喩えが説かれる。」（148）

心は、限りない煩悩と苦悩の法につき従われているが、本性的に光り輝いているために、変化を蒙ることはない。それゆえ、善妙な金のように、無変異性（ananyathābhāva）の意味で、「真如」といわれる。そしてそれ（真如）はまた、邪定聚の個体連続（相続）をもつ有情たちにとって、本来的に区別されていないが、すべての偶来的な垢の浄化に到達したとき、「如来」という名称を得る。このようにして、1つの、金の喩例によって、真如が無差別であるという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の真如[3]を血筋[4]［＝胎から胎児に継承される本質］としている。」（tathāgatatathataiṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。

心の本性清浄にして（＝無垢であり cf. k. 27［＝本偈 5］）不二を性質とすることに関して世尊は次のように説かれている。

「そこにおいてマンジュシュリーよ、如来は我の執着（我取）の根元を遍知している。自らが清浄であることによって、すべての有情の清浄であることを理解する。自らが清浄であることと、［すべての＝Tib.］有情が清浄であること、これは不二であり、2つに分けられない。」（*Jñānālokālaṃkāra*, pp. 64–65）と。

同様にして、じつに［『大乗荘厳経論』の著者は］次のように言う。

「真如はすべてにとって区別されていないが、清浄さに到達したときに、如来たるものである。それゆえにまた、すべての生き物（有身者＝有情）は、それ（如来）の胎児である（＝清浄さに到達したときには

---

3　tathagatatathataiṣāṃ em., cf. Tib: de bzhin gshegs pa'i de bzhin nyid; tathagatas tathataiṣāṃ Johnston, Ms. B(37a4). See RGV. 26.8（ad v. 27): tathāgatatathatā-vyatibhedārthena「如来の真如が無差別であるという意味で」。

4　原［1987: 807］参照。なお、これに関連して同［1987: 808–810］, Hara［1994: 52–55］は、deva-garbha（「神の胤」「神の子」「神の胎児」）の用例と tathāgata-garbha との近似性を指摘する。

「如来」といわれ、本来的に区別されていない真如を血筋（lineage）とする）。」（『大乗荘厳経論』MSA 9.37）

（3）如来の種姓

「種姓、それは２種類で、［それぞれ宝］蔵、果樹のようであると知るべきである。無始の本性としてある（anādiprakṛtistha）［種姓］と、のちに獲得された（samudānīta）［種姓］とである。」（149）

「［自性身、受用身、変化身という］３種の仏身の獲得は、この２つの種姓によると考えられる。第１［の本性住の種姓］から第１の［自性］身が、一方また、第２［の獲得された種姓］から、後の［受用身と変化身の］２つがある。」（150）

「清浄な自性身は宝像のようであると知るべきである。作られないものであり、本性は功徳の宝の拠り所であるから。」（151）

「大法王であるから、受用［身］は転輪王のようであると［知るべきであり］、変化［身］は、映像を本質とするのであるから、金像のようであると［知るべきである］。」（152）

以上のように、これら残りの５つ、すなわち［宝］蔵と、［果皮内の種子から生じる果］樹と、宝像と、転輪王と、金像の喩例によって［自性身、受用身、変化身という］３種の仏身を生じる種姓が実在するという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の本性を血筋［＝胎から胎児に継承される本質］としている。」（tathāgatadhātur eṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。

じつに、如来であることは、３種の仏身をもって顕わされる。それゆえ、「如来の本性」とは、そ［の３種の仏身］の獲得のための原因［という意味］である。このばあい、「本性」（dhātu）の意味は、原因（hetu）という意味である。なぜなら、次のように説かれるから。

「［貧女が転輪王を懐胎する喩例の中で、］そのばあい、それぞれの有情には、［貧女の］子宮（胎）の中にある（garbhagata）如来の本性が生じている。しかし、かれら有情たちは知らない。」（『如来蔵経』[5]）

同様に、また説く。

「無始時来の本性（anādikāliko dhātuḥ）は、一切法の拠り所である。それがあるとき一切の［輪廻の］趣くところ（gati）があり、また涅槃の証得もある。」（『大乗阿毘達磨経』）

この中で、「無始時来」（anādikālika）とはどうしてか。すなわち、ほかならぬ如来の血筋（如来蔵）に関して、世尊は「前際は知られない」と説かれ、示されているということをいう。

「本性」（dhātu）について、［『勝鬘経』は］「世尊よ、この如来の血筋（如来蔵）とは出世間の血筋であり、本来的に清浄な血筋である」と説く。

「一切法の拠り所」（sarvadharmasamāśraya）について、［『勝鬘経』は］「それゆえ、世尊よ、如来の血筋（如来蔵）は、［それと］結合し、不可分で、智と離れず、無為である諸法にとって、所依（niśraya）であり、支え（ādhāra）であり、基盤（pratiṣṭhā）である。世尊よ、如来の血筋（如来蔵）は、［それと］結合せず、分離した、智と離れた、有為である諸法にとっても、所依であり、支えであり、基盤である。」と説く。

「それがあるとき、一切の［輪廻の］趣くところがある」（tasmin sati gatiḥ sarvā）ということについて、［『勝鬘経』は］「世尊よ、如来の血筋（如来蔵）があるとき輪廻がある、という考えは、この［如来蔵の］語のためにあります。」と説く。

「また涅槃の証得もある」（nirvāṇādhigamo 'pi ca）ということについて、［『勝鬘経』は］「世尊よ、もしも如来の血筋（如来蔵）が存在しないなら、苦を厭うこともなく、また涅槃を望むことも、求めることも、願うこともないでしょう。」云々と説く。

（evaṃ padmādibhis tulyā nava rāgādayo malāḥ/
dhātor buddhādisādharmyaṃ svabhāvatrayasaṃgrahāt// (143)

trividhaṃ svabhāvam adhikṛtya cittavyavadānahetos tathāgatagarbhasya navadhā buddhabimbādi-sādharmyam anugantavyam/ trividhaḥ

5 See Zimmermann [2000: 215–216].

svabhāvaḥ katamaḥ/

svabhāvo dharmakāyo 'sya tathatā gotram ity api/
tribhir ekena sa jñeyaḥ pañcabhiś ca nidarśanaiḥ// (144)

tribhir buddhabimbamadhusāradṛṣṭāntair dharmakāyasvabhāvaḥ sa dhātur avagantavyaḥ/ ekena suvarṇadṛṣṭāntena tathatāsvabhāvaḥ/ pañcabhir nidhitaruratnavigrahacakravartikanakabimba-dṛṣṭāntais trividha-buddhakāyotpattigotrasvabhāva iti/

(1) tatra dharmakāyaḥ katamaḥ/
dharmakāyo dvidhā jñeyo dharmadhātuḥ sunirmalaḥ/
tanniṣyandaś ca gāmbhīryavaicitryanayadeśanā// (145)

dvividho buddhānāṃ dharmakāyo 'nugantavyaḥ/ suviśuddhaś ca dharmadhātur avikalpajñāna-gocaraviṣayaḥ/ sa ca tathāgatānāṃ pratyātmam adhigamadharmam adhikṛtya veditavyaḥ/ tatprāpti-hetuś ca suviśuddhadharmadhātuniṣyando yathāvaineyikaṃ parasattveṣu vijñaptiprabhavaḥ/ sa ca deśanādhamam adhikṛtya veditavyaḥ/ deśanā punar dvividhā sūkṣmaudārikadharmavyavasthānanaya-bhedāt/ yad uta gambhīrabodhisattvapiṭakadharma-vyavasthānanayadeśanā ca paramārthasatyam adhikṛtya vicitrasūtrageyavyākaraṇagāthodāna-nidānādivividhadharmavyavasthānanayadeśanā ca saṃvṛtisatyam adhikṛtya/

lokotaratvāl loke 'sya dṛṣṭāntānupalabdhitaḥ/
dhātos tathāgatenaiva sādṛśyam upapāditam// (146)
madhvekarasavat sūkṣmagambhīranayadeśanā/
nānāṇḍasāravaj jñeyā vicitranayadeśanā// (147)

ity evam ebhis tribhir buddhabimbamadhusāradṛṣṭāntais tathāgatadharmakāyena niravaśeṣa-sattvadhātuparispharaṇārtham adhikṛtya tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā iti paridīpitam/ na hi sa kaścit sattvaḥ sattvadhātau saṃvidyate yas tathāgatadharmakāyād bahir ākāśadhātor iva rūpam/ evaṃ hy āha/

yathāmbaraṃ sarvagataṃ sadā mataṃ
tathaiva tat sarvagataṃ sadā matam/
yathāmbaraṃ rūpagateṣu sarvagaṃ
tathaiva tat sattvagaṇeṣu sarvagam iti// (MSA, 9.15)

(2)
prakṛter avikāritvāt kalyāṇatvād viśuddhitaḥ/
hemamaṇḍalakaupamyaṃ tathatāyām udāhṛtam// (148)

yac cittam aparyantakleśaduḥkhadharmānugatam api prakṛtiprabhāsvaratayā vikāraṃ na bhajate 'taḥ kalyāṇasuvarṇavad ananyathābhāvārthena tathatety ucyate/ sā ca sarveṣām api mithyātvaniyatasaṃtānānāṃ sattvānāṃ prakṛtinirviśiṣṭā 'pi sarvāgantukamalaviśuddhim āgatā tathāgata iti saṃkhyāṃ gacchati/ evam ekena suvarṇadṛṣṭāntena tathatāvyatibhedārtham adhikṛtya tathagatatathataiṣāṃ[3] garbhaḥ sarvasattvānām iti paridīpitam/ cittaprakṛtiviśuddhyadvaya-dharmatām upādāya yathoktaṃ bhagavatā/

tatra mañjuśrīs tathāgata ātmopādānamūlaparijñātāvī/ ātmaviśuddhyā sarvasattvaviśuddhim anugataḥ/ yā cātmaviśuddhir yā ca sattvaviśuddhir advayaiṣādvaidhīkāreti/ (JĀ, pp. 64–65)

evaṃ hy āha/

sarveṣām aviśiṣṭāpi tathatā śuddhim āgatā/
tathāgatatvaṃ tasmāc ca tadgarbhāḥ sarvadehina iti// (MSA 9.37)

(3)

gotraṃ tad dvividhaṃ jñeyaṃ nidhānaphalavṛkṣavat/
anādiprakṛtisthaṃ ca samudānītam uttaram// (149)
buddhakāyatrayāvāptir asmād gotradvayān matā/
prathamāt prathamaḥ kāyo dvitīyād dvau tu paścimau// (150)
ratnavigrahavaj jñeyaḥ kāyaḥ svābhāvikaḥ śubhaḥ/
akṛtrimatvāt prakṛter guṇaratnāśrayatvataḥ// (151)
mahādharmādhirājatvāt sambhogaś cakravartivat/
pratibimbasvabhāvatvān nirmāṇaṃ hemabimbavat// (152)

ity evam ebhir avaśiṣṭaiḥ pañcabhir nidhitaruratnavigrahacakravartikanakabimbadṛṣṭāntais trividhabuddhakāyotpattigotrasadbhāvārtham adhikṛtya tathāgatadhātur eṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti paridīpitam/ trividhabuddhakāyaprabhāvitatvaṃ hi tathāgatatvam/ atas tatprāptaye hetus tathāgatadhātur iti/ hetvartho 'tra dhātvarthaḥ/ yata āha/

tatra ca sattve sattve tathāgatadhātur utpanno garbhagataḥ saṃvidyate na ca te sattvā budhyanta iti/ (*Tathāgatagarbhasūtra*[6])

evaṃ cāha/

anādikāliko dhātuḥ sarvadharmasamāśrayaḥ/
tasmin sati gatiḥ sarvā nirvāṇādhigamo 'pi ca// (*Mahāyānābhidharmasūtra*)

tatra katham anādikālikaḥ/ yat tathāgatagarbham evādhikṛtya bhagavatā pūrvakoṭir na prajñāyata iti deśitaṃ prajñaptam/

dhātur iti/ yad āha/

yo 'yaṃ bhagavaṃs tathāgatagarbho lokottaragarbhaḥ prakṛtipariśuddhagarbha iti/（ŚMDS）

sarvadharmasamāśraya iti/ yad āha/

tasmād bhagavaṃs tathāgatagarbho niśraya ādhāraḥ pratiṭiṣṭā saṃbaddhānām avinirbhāgānām amuktajñānānām asaṃskṛtānāṃ dharmāṇām/ asaṃbaddhānām api bhagavan vinirbhāgadharmāṇāṃ muktajñānānāṃ saṃskṛtānāṃ dharmāṇāṃ niśraya ādhāraḥ pratiṭiṣṭā tathāgatagarbham iti/（ŚMDS）

tasmin sati gatiḥ sarveti/ yad āha/

sati bhagavaṃs tathāgagarbhe saṃsāra iti parikalpam asya vacanāyeti/（ŚMDS）

nirvāṇādhigamo 'pi ceti/ yad āha/

tathāgatagarbhaś ced bhagavan na syān na syād duḥkhe 'pi nirvinna nirvaneccha prārthanā praṇidhir veti vistaraḥ/（ŚMDS））（RGV, pp. 69.15–73.8）

## III　考察と結語

以上のⅠとⅡの内容を、ここでは簡潔に整理し、考察を加えたい。当該箇所は『如来蔵経』の宣言文、すなわち「すべての有情は如来蔵である」（sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ）に対する『宝性論』の著者[6]による解釈を提示する。

先のⅠおよびⅡに見られるように、『宝性論』の著者は上記の宣言文を次のように解釈する。すなわちⅠでは、

「要約すると、3種の意味で、常に「すべての有情は如来蔵である。」と世尊は説かれたのである。すなわち、

（1）すべての有情に如来の法身（tathāgata-dharmakāya）が遍満しているという意味で、

6『宝性論』の著者問題については、高崎［1989: 389–397］参照。

(2) 如来の真如（tathāgata-tathatā）が無差別であるという意味で、および

(3) 如来の種姓（tathāgata-gotra）が実在するという意味で、

である。さらに、これら 3 種の意味の句についての解説は、のちに『如来蔵経』にしたがってなすであろう。」

と述べ、『如来蔵経』が語る「すべての有情は如来蔵である。」という宣言文は、世尊が法身、真如、種姓という 3 種の意味で説かれたものであるとして、詳細な説明を II の箇所に委ねる。その II では、当該の宣言文を、tathāgata-garbha（如来蔵）の複合語解釈を交えながら、3 つの意味それぞれを詳説する。すなわち、法身、真如、種姓という 3 種の意味と複合語解釈を交えたその解説によれば、

(1)「如来の法身が、有情界（sattvadhātu）に余すところなく遍満しているという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」（tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。」

(2)「真如が無差別であるという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の真如を血筋［＝胎から胎児に継承される本質］としている。」（tathāgatatathataiṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。」

(3)「［自性身、受用身、変化身という］三種の仏身を生じる種姓が実在するという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の本性を血筋［＝胎から胎児に継承される本質］としている。」（tathāgatadhāturesāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti）と［『如来蔵経』で］説示されたのである。」

という。

以上の考察から、次のような結論が導かれることになる。第 1 に、『宝性論』の著者は、「すべての有情は如来蔵である」（sarvasattvās tathāgata-garbhāḥ）という『如来蔵経』の宣言文を、すべての有情には、(1) 法身（tathāgata-dharmakāya）が遍満している、(2) 如来の真如（tathāgata-

tathatā）が無差別である、および（3）如来の種姓（tathāgata-gotra）が実在するという 3 種の意味で理解する[7]。

第 2 に、『宝性論』の著者は、先の宣言文内の複合語 tathāgata-garbha（如来蔵）の中の tathāgata（如来）を、（1）如来の法身、（2）如来の真如、（3）如来の種姓（あるいは本性 dhātu）をさすと解釈したうえで、（1）については、tathāgata-garbha を格限定複合語（tatpuruṣa）と見なして、先の『如来蔵経』の宣言文 sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ「すべての有情は如来蔵である。」を、すべての有情は、如来の法身（＝法身としての如来）の胎児（garbha,＝［出生前の］子）である、と解釈する。（2）（3）については、いずれも tathāgata-garbha を所有複合語と見て、すべての有情は、（2）如来の真如を血筋（garbha）とする、（3）如来の種姓（あるいは本性）を血筋とする、と解釈する。複合語 tathāgata-garbha を、それぞれ–dharma-kāya–、–tathatā–、–gotra–という中間語（madhyapada）が省略された熟語と見なす解釈ともいえるが、大乗仏教系の経論において如来蔵（tathāgata-garbha）が説かれるの 3 つの代表的な文脈を示してもいる。

なお、『宝性論』の著者は、tathāgata-garba を所有複合語として解説する（2）（3）とは異なり、（1）のすべての有情に如来の法身が遍満するという意味に関してのみ、「これらすべての有情は、如来の法身を血筋とする」ではなく、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」と、格限定複合語として説明する。この点は、「如来」を、法身としての如来に限定して、すべての有情はその胎児（＝［出生前の］子）であるという説明がよりふさわしいとの解釈に立つといえようか。

第 3 に、したがって、「すべての有情は如来蔵である。（sarvasattvās

---

7『宝性論』の著者はまた、II に見るように、これら 3 つの観点から、『如来蔵経』の 9 喩を意味づける。すなわち、「蓮華中に坐す仏の像」「衆蜂に囲まれた蜂蜜」「殻皮中の実」の 3 つの喩例が、すべての有情に（1）法身が遍満することを喩え、同様に、「汚物に落ちた金塊」という 1 つの喩例が（2）如来の真如が無差別であることを、また「貧家地中の宝蔵」「果実皮の中の種子」「弊衣中の宝像」「貧女胎中の王子」「泥模中の金像」の 5 つの喩例が（3）如来の種姓が実在することを喩えると意味づける。

tathāgatagarbhāḥ)」の一文そのものは、『宝性論』によるかぎり、(1)（2）(3）の３つの意味すべてを包摂する解釈が期待される。この点で、tathāgatagarbha「すべての有情は如来の胎児である」（Tp）＝「すべての有情は如来の血筋［胎から胎児に継承される本質[8]］をもつ」（Bv）のいずれも意味するところは実質的に等しく、『宝性論』の著者の tathāgatagarbha 理解はここにあると考えられる。

第４に、それゆえ、『如来蔵経』の「すべての有情は如来蔵である」（sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ）の一文に対する「すべての有情は如来を内に宿している。」というような解釈（*yeṣāṃ garbhe ['sti] tathāgato te sarvasattvā iti)[9]は、本稿が検証した『宝性論』の理解（(1): Tp, (2) (3): Bv）には一致しない。さらにまた、このような解釈は、９つの喩例をもって「すべての有情は如来性＝仏性をもつ」「すべての有情に如来性＝仏性がある」ことを主題とする『如来蔵経』に合致する解釈とも考えられない。この『如来蔵経』における「如来蔵」解釈をめぐる問題については別稿を期したい。

［略号］

D: sDe dge edition.

JĀ: *Jñānālokālaṃkāra*. T. Kimura et al., ed., *Sarvabuddhaviṣayāvatāra-jñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtra*, 2004.

MSA: *Mahāyānasūtrālaṃkāra*。 S. Lévi ed., *Asaṅga, Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra*, Paris, 1907.

P: Peking edition.

RGV: *Ratnagotravibhāga*, See Johnston 1950.

ŚMDS: *Śrīmālādevīsiṃhanādasūtra*. P No. 760（-48), D No. 92.

---

8 Cf. Tib. snying po（心髄、精華）。

9 高崎［1989: i］、Takasaki［2000: 76］、ツィンマーマン［2014: 118-121, 137（n.34)］。

［参考文献］（刊行年次順）

Johnston, E. H. ［1950］: *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna: The Bihar Research Society.

中村瑞隆［1961］:『梵漢対照・究竟一乗宝性論研究』山喜房佛書林。

Takasaki, J. ［1966］: *A Study on the Ratnagotravibhāga*（*Uttaratantra*）*Being a Treatise on the Tathāgatagarbha Theory of Mahāyāna Buddhism*, Serie Orientale Roma XXXIII, Roma: Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Seyfort-Ruegg, D. ［1969］: *La Théorie du Tathāgatagarbha et du Gotra, Études sur la sotériologie et la Gnoséologie du Bouddhisme*, PEFEO 70, Paris: École Française d'Extréme-Orient.

Schmithausen, L. ［1971］: "Philologische Bemerkungen zum *Ratnagotravibhāga*", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie* 15, pp. 123–177.

高崎直道［1974］:『如来蔵思想の形成』春秋社。

松本史朗［1986］:「如来蔵思想は仏教にあらず」『印度学仏教学研究』35–1, pp. 127132.

原實［1987］:「Garbha 研究」『高崎直道博士還暦記念論集・インド学仏教学論集』春秋社, pp. 801–816.

松本史朗［1989］:『縁起と空―如来蔵思想批判』大蔵出版.

高崎直道［1989］:『宝性論』（インド古典叢書）講談社。

袴谷憲昭［1990］:『本覚思想批判』大蔵出版

下田正弘［1991］:「『大乗涅槃経』と『宝積経・摩訶迦葉會』―佛塔信仰の否定―」『東方学』82, pp. 118–129.

Hara, M. ［1994］: "*Deva-garbha and Tathāgata-garbha*." *The Buddhist Forum*, Vol. III, Papers in honour and appreciation of Professor David Seyfort Ruegg's contribution to Indological, Buddhist and Tibetan Studies, ed. by T. Skorupski and U. Pagel. London: School of Oriental and African Studies, University of London, pp. 37–55.

松本史朗［1994］:「蓮華蔵と如来蔵」『禅思想の批判的研究』大蔵出版,

pp. 411–543.

下田正弘［1997］:『涅槃経の研究―大乗経典の研究方法試論―』春秋社。

Takasaki, J. [2000]: “The Tathāgatagarbha Theory Reconsidered: Reflections on Some Recent Issues in Japanese Buddhist Studies”, *Japanese Journal of Religious Studies* 27/1–2, pp. 73–83.

Zimmermann, M. [2000]: “Brief Communication: Identification of a Quotation in the *Ratnagotra-vibhāgavṛtti*”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 1999* (Vo.l. 3), 2000, pp. 215–216.

――――――――――― [2002]: *A Buddha Within: The Tathāgatagarbhasūtra The Earliest Exposition of the Buddha-Nature Teaching in India*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VI, International Research Institute for Advanced Buddhology, Tokyo: Soka University.

下田正弘［2014］:「如来蔵・仏性思想のあらたな理解に向けて」『如来蔵と仏性』（シリーズ大乗仏教 8）春秋社, pp. 3–95.

ツィンマーマン・ミヒャエル［2014］:「『如来蔵経』再考―仏性の九喩を中心として」『如来蔵と仏性』（シリーズ大乗仏教 8）春秋社, pp. 97–139.

加納和雄［2014］:「『宝性論』の展開」『如来蔵と仏性』（シリーズ大乗仏教 8）春秋社, pp. 205–247.

Radich, M. [2015]: *The Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra and the Emergence of Tathāgatagarbha Doctrine*, Hamburg Buddhist Studies 5, Hamburg University Press.

Jones, Chr. J. [2016]: “Beings, Non-Beings, and Buddhas: contrasting notions of *tathāgatagarbha* in the *Anūnatvāpūrṇatvanirdeśa* and **Mahābherī-sūtra*”, *Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies* 10, pp. 53–84.

加納和雄［2017］:「*Tathāgatagarbhaḥ sarvasattvānām*―涅槃経における如来蔵の複合語解釈に関する試論―」*Critical Review for Buddhist Studies*（仏教学レビュー）22, 金剛大学校, pp. 9–61.

Jones, Chr. J. [forthcoming 2018]: “Selfhood and Mystery: *Tathāgatagarbha*

Doctrine in the *Mahāparinirvāṇamahāsūtra*", M. Blum & M. Shimoda (eds.), volume on the *Mahāparinirvāṇasūtra*, Hamburg University Press.

（平成 28–30 年度 科学研究費補助金・基盤研究（A）「バウッダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」の研究成果の一部）

# SUMMARY

## On the Interpretation of *tathāgatagarbha* in the *Ratnagotravibhāga*

SAITO Akira

The exploration of the semantics of the *tathāgatagarbha* compound has a long history in the modern research on Mahāyāna Buddhism. Despite a good number of studies dedicated to the topic, the question is unfortunately far from being solved.

The present paper revisits the meaning of *tathāgatagarbha* as interpreted in the *Ratnagotravibhāga* (RGV). The different interpretations of the *tathāgatagarbha* compound in the RGV make it a particularly valuable source in this respect. It was the *Tathāgatagarbhasūtra* which first declared that "all living beings are *tathāgatagarbha*s." This *sūtra*, however, does not contain any analytic explanation of the compound. Instead, it clarifies the tenet by means of nine similes. In contrast, the RGV deals directly and in detail with *tathāgatagarbha* as the cause of the emergence of the Three Jewels. The focus of its interpretation is on the teaching that "all living beings are *tathāgatagarbha*s." The word *tathāgatagarbha* in this statement is understood from three perspectives, i.e. (1) *dharmakāya*, (2) *tathatā*, and (3) *gotra*, and is interpreted as both a *tatpuruṣa* compound [(1)] and a *bahuvrīhi* compound [(2), (3)].

According to this explanation encompassing three semantic dimensions, the RGV authors appear to have construed the word *tathāgatagarbha* as "embryo (*garbha*) of a *tathāgata*" or "having the genealogy (*garbha*) of a *tathāgata* within." This interpretation underlies not only the RGV but also the above statement in the *Tathāgatagarbhasūtra* ("all living beings are embryos of a *tathāgata*" or "all living beings have the genealogy of a

*tathāgata* within”).

*Professor,*
*International College*
*for Postgraduate Buddhist Studies*